



(絵巻) 地震鯰を押さえる鹿島大明神 (埼玉県立博物館蔵)

かわはく No.21

CONTENTS

特別展「ナマズ・鮠・なまず大集合！」	2
第1回テーマ展「荒川が生んだ焼き物—今戸焼—」	4
かわはくの展示から「見沼通船堀」	5
博学連携事業から	5
川の博物館と地域連携	6
身近な水紀行「元荒川の源流を訪ねて」	7
かわはくで学ぼう	8



平成16年度特別展

ナマズ・鯰・なまず大集合！

開催期間：平成16年10月9日（土）～11月28日（日）

鯰（なまず）を通して、日本人の庶民生活や文化をふり返ってみようとする展覧会です。

先人たちは、ナマズの特徴や習性・行動を長年にわたり観察することによって、様々な情報を蓄積し、そして利用してきました。好む場所やエサの食べ方などの知識から、独特な漁法を生み出しました。産卵時の行動から、夫婦和合・安産祈願の対象ととらえました。また、地震や洪水など天災が起こる際に、水面に現れる様子を見聞してきたことら、地震よけ・水難よけの神として祀るようになります。

一方、ナマズのヌルヌルした体表や長い2本のヒゲなど特徴的な容姿をもとに、時の権力者や世相を風刺する鯰の絵画が作られました。

また、鯰は、悪と善との間で揺れ動く道化として、日本の伝統芸能である歌舞伎の演目にも取り上げられるなど、さまざまな場面で登場しています。

このような視点から、今回の展覧会では、漁具、絵馬、絵画や作品・グッズ、歌舞伎衣裳などを通して、私たちと鯰との関係を多角的に紹介します。

関連展示として、当館内の溪流観察窓において生きたナマズも公開します。

第一部 鯰の生活誌

現在では、日本全国でみられるナマズですが、関東地方に姿をあらわし、江戸っ子が食べ始めたのは江戸時代中期（1720年代）以降であるといわれています。海のない埼玉県域では、昭和30年代まで、ナマズは、コイやドジョウなどとともに重要なタンパク源として、捕らえられ食されました。

また、先人たちは、ナマズの形態や習性を観察してきた長年の経験から、病氣平癒や天災よけ・地震よけを祈る信仰の対象として鯰をとらえることになりました。

一 ナマズを釣る

ナマズ漁は、網や釣り竿を用いるほかに、狭いところを好み夜行性である習性を利用したウケやナガナワによる方法も用いました。また、ナマズ釣りの独特な方法にポカン釣りがあります。これは、水面近くにいる小魚やカエルを下から食いつくナマズの習性を利用して、釣り糸の先につけたカエルで水面

をたたいてナマズをおびきだし捕獲するものです。江戸時代の図鑑などの記載から遅くとも江戸時代の後半には行われていました。

二 鯰を祀る・鯰に祈る

日中は水底にひそむナマズが水面に現れると、天候がくずれるという言い伝えがもとになり、鯰は降雨祈願の神の使いとして祀られました。逆に、鯰の怒りをもって洪水が起きないようにと、水害よけの神様としている地方もあります。一方、ナマズは、地震の前にも水面に姿を現すという経験から得られた知識により、地震よけとしても信仰の対象となりました。また、鯰は、皮膚病を治す・無病息災を願うものとして、絵馬に描かれ奉納されています。



地震よけとして親しまれている「なまずさん」

（群馬県板倉町 雷電神社）

第二部 鯰の文化史

鯰は、今日にいたるまで様々な姿で描かれてきました。ユーモラスで特徴的な姿を単に描いた作品もありますが、特定の人物や権力者を鯰に見立て、鯰を批判することにより、特定の人物を風刺している作品があります。

ここでは、水墨画・錦絵（浮世絵）・新聞・雑誌に描かれた鯰を通して、それぞれの作品が作成された時代における、絵に隠された当時の世相や人々の思いを探ってみようと思います。

一 禅僧が描いた鯰の水墨画<中世>

鯰を描いた絵画で、著名なものに15世紀初頭、禅僧の如拙が描いた水墨画「(国宝) 鯰鮎図」があります。この絵には、ヒゲだらけの男が空中に舞う瓢箪を両手で上から抑えており、その下には川を泳ぐ大鯰が描かれています。絵の上に記された文や



31の詩から、「瓢箪で鯨をおさえることができるか」というテーマに基づいて描かれていることがわかります。

二 鯨絵にみる江戸文化〈近世〉

安政2(1855)年10月2日の夜に、江戸で大地震が起きました。この時、震災直後から復興事業が一段落するまでの間、当時の世相や人々の思いを、鯨を通して描いた錦絵である鯨絵が数多く刊行され、人々の共感を呼びました。鯨絵は、地震に対する庶民感情や震災後の世相のみならず、幕末の江戸市中の風俗や年中行事が巧みに盛り込まれており、江戸のくらしや文化を知ることができます。

三 鯨絵に託された思い・世相風刺〈近代〉

明治維新の後、政府の政策や役人の不正など、批判の対象を別なものに見立てて表現する風刺画が作られました。このなかで、政治家や役人は鯨にたとえられ批判されています。彼らは、鼻の下に左右にのびるヒゲをはやしていたことから、長い二本のヒゲが特徴的な鯨に見立てられたのです。

一方、大正12(1923)年の関東大震災時には、地震後の世相を伝える鯨絵も作られています。

第三部 伝統文化と鯨

現在、画一化された感のある日本ですが、物事のとらえ方や認識が、東日本と西日本では異なることがあります。鯨押さえという事柄もそれぞれの地域の伝統に基づき特色があります。

また、歌舞伎の中に鯨が登場し、舞台に彩りを添えるとともに、とらえどころのない鯨のイメージが歌舞伎によって広められ、定着していきました。

一 西の瓢箪鯨と東の要石鯨

関西を中心とする西日本では、如拙筆「瓢箪鯨」の流れから、瓢箪で鯨を押さえる図が、大津絵や震災後の書物に記され、祭礼の山車にも登場します。



猿が瓢箪で押さえる鯨
〔大津絵〕瓢箪鯨
(町田市立博物館蔵)
「道ならぬ物をほしかりやまさるの心からとや測にしつまん」

一方、関東を中心とする東日本では、鹿島神宮の大明神が要石で鯨を押さえるものとされ、祭礼の山車や震災報道の刷り物に描かれています。



要石鯨の山車「神田明神祭礼図」(東京国立博物館蔵)

安政2(1855)年に作られた鯨絵のなかに、鹿島大明神が瓢箪で鯨を押さえる作品が登場するにおよび、江戸において鯨押さえに対する東西の認識が融合されたこととなります。

二 歌舞伎と鯨

歌舞伎には、ガマカエルや虎・狐・鼠など、話の展開において重要な役割を演じる動物が登場します。歌舞伎に登場する鯨は、大きくわけて二形態あります。ひとつは、「傾城反魂香」などに登場する大津絵のなかの瓢箪鯨です。もうひとつは、「暫」に登場する鯨坊主です。どちらも主人公ではありませんが、彩りを添える名脇役として欠かせない存在です。



歌舞伎に登場する鯨坊主「〔鯨絵〕しばらくのそとね」

(町田市立博物館蔵)

コラム 私の愛した鯨たち鯨グッズのコレクション

先人達の鯨に対する思いや各地の伝説や祭礼に基づく郷土玩具のほか、今日では町おこしの道具立てとして愛らしい姿をデザインした鯨グッズが作られています。鹿嶋市や大垣市・栃木市が有名ですが、埼玉県内では吉川市が「なまずの里」として精力的に活動しています。

今回は、著名な収集家の方々の協力を得て、鯨のデザインされた様々なグッズを集めてみました。

(展示担当 加藤 光男)



荒川が生んだ焼き物 - 今戸焼 -

荒川の下流隅田川右岸にある今戸の地では、荒川が上流から運んで堆積させた荒木田土と呼ばれる粘土で江戸時代以降今戸焼が焼かれていました。また、今戸は江戸の名所でもあり、絵画・文学・落語などに多く取り上げられています。

1 今戸焼の始まり

今戸焼は、江戸時代中期以降、隅田川（荒川）の右岸現在の台東区今戸で焼かれた焼き物を言います。その始まりには不明な点が多いのですが、天正年間（1573-1591）に千葉氏（鎌倉・室町時代に下総守護）の家臣が住み着いて、荒川の氾濫原で採取された粘土「荒木田土」を用いて瓦や土器を焼いたのが始まりとの説があります。



江戸名所図会 長谷川雪見・雪堤 当館蔵

江戸後期の風俗などを絵入で紹介した「江戸名所図会」では、職人が日常雑器や茶器などの土器を轆轤で製作している様子と子供づれの客と思われる老人、棚には売り物の土風炉、涼炉などが描かれ、今戸が焼き物の産地であったことを知ることができます。

2 色々な焼き物

今戸焼で、最もよく知られているのは上人形でしょう。土人形は江戸時代以降浅草周辺と隅田川の遊興地化により多くの人々が訪れるようになり、お土産品として人気定着しました。作品には、花魁・招き猫・相撲取り・狐や狸などがあります。

招き猫は現在でも有名で、江戸時代の言い伝えに老婆が猫を飼えなくなり泣く泣く手放したところ、夢にその猫が出て来て「猫の人形を作り祈れば願いがかんう」というのでそのとおりにしたところ、再



花魁 鴻巣市教育委員会蔵



招き猫 鴻巣市教育委員会蔵



相撲取り 鴻巣市教育委員会蔵



鉄砲狐 鴻巣市教育委員会蔵

び猫と暮らせるようになったという話があることから、今戸が招き猫の発祥の地との説があります。

人形のほかには、焙烙・灯火具・火入れなどの日常雑器や茶道具の土風炉、涼炉、茶碗も多く焼かれました。更に瓦は、江戸時代に防火のために瓦屋根が奨励されたこともあり大量に焼かれ、隅田川の舟運を利用して出荷される様が、葛飾北斎により「繪本隅田川両岸一覽」に描かれています。馴染みがあるものでは、蚊取り線香を入れる「蚊取り豚」も今戸で焼かれました。

3 今戸の風景

今戸は、焼き物の産地として栄えた一方で江戸の名所としても有名です。

鶴岡蘆水が描いた「隅田川両岸一覽」では、隅田川沿いに多くの窯や燃料にした薪が描かれ窯業が盛んな様子がわかります。また、歌川広重の「名所江戸百景隅田河橋場の渡



名所江戸百景 歌川広重 当館蔵



隅田川両岸一覽 鶴岡蘆水 当館蔵

かばら籠」では、在野業平の詠んだ「都鳥」とともに煙をたなびかせた瓦窯が描かれています。

(展示担当 西口 正純)



～かわはくの展示から～

見沼通船堀

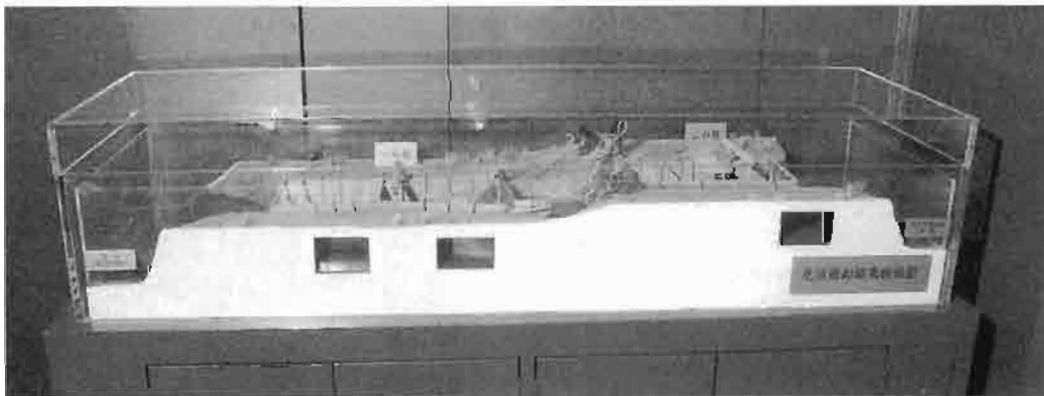
「見沼通船堀」とは芝川と見沼代用水とを結び、江戸と大宮台地東縁部の村々との間に舟運を運行させるために1731年（享保16年）に造られた運河のことです。

見沼代用水は利根川から取水して大宮台地を南下するように掘削された灌漑用水で、見沼付近では芝川より3mも水位が高かったことから、途中に閘門（水量調節用の堰）を2か所設けることで舟の運航を可能としました。見沼通船堀は閘門式の運河としては、我が国最古のものであることから国指定史跡となっています。

この通船堀の完成によって、見沼代用水は芝川と結ばれ、村々と江戸との間に舟便の運航を可能としたのでした。舟を用いて年貢米や野菜、薪などを江戸に運び、一方、江戸からは肥料や塩、魚などが運ばれてきました。

川の博物館では見沼通船堀の仕組みがより良く理解できるように模型を用意し、水位調節と舟の運行が一目で解るように工夫された展示となっています。是非、見学にご来館ください。

（展示担当 栗島 義明）



順調な学校受け入れ、進行中

博学連携事業

前号「かわはくNo.20」で、博学連携チームによる学校対応の活性化について、お知らせしました。お陰様でこの博学連携事業は、順調に進んでいます。学校受け入れ件数は、前年度の1.5倍にもなっています。

8月23日と25日に開催された小中学校教員対象の利用促進研修会でも県内小中学校から49名の先生方をお迎えし、次のような貴重な意見をいただきました。

- ・ 見学内容を充実させるため、2か所1日で実施することが多い。そのため、川博での体験学習に十分時間がとれない。
- ・ 大規模校では、どの施設でも体験学習の受け入れ体制が十分でなく、断られることが多い。単に展示の見学に終わってしまうのが残念だ。

・ グループ行動の子どもたちにも対応してくれる博物館が増えて有り難い。…

こうした先生方の意見に対応するため

- ①川博での活動時間の少ない学校には、せめて屋外施設の水車・荒川大模型・溪流観察窓の説明を勧める。
- ②大規模校には、課題別のグループを設定し、対応する博物館職員の配置を多くする。などの順応性を持たせています。こうしたことを可能にするため
- ①早めの連絡・相談（最低1か月前）
- ②学校の計画の明確化と博物館への提示
- ③川博ホームページ学校支援コーナーの活用

の3点について、是非ご協力をお願いします。

（博学連携チーム）



● 川の博物館と地域連携 ●

さいたま川の博物館では様々な催し物を行って来館者の方々に楽しんで頂いています。その中には、館のある寄居周辺地域の色々な団体で、川に関連するテーマを持って参加して頂いているものがあります。それにはイベント的なものと、展示があります。

その一つは今年春、4月29日（木）に行われた荒川劇場「川と太鼓」と5月1日に行われた荒川劇場「川と獅子舞」です。前者は上里町の乾武神流川太鼓、そして後者は、花園町黒田に伝わる「ささら獅子舞」を保存会等の方々に博物館の玄関前の広場で演じて頂き、来館された親子連れに楽しんで頂きました。

夏には8月8日の「かわはく夏祭り」の日の夕方ライトアップに合わせて寄居鳴子会などの地元の方々の御協力で鳴子&太鼓フェスティバルが開催され地域の方々に楽しんで頂きました。

展示では、昨年6月に開催された「荒川を撮る会写真展」があります。これは寄居町を中心に活動する荒川を撮る会のメンバーが荒川の源流・甲武信岳から隅田川・東京湾の河口までの様々な風物を撮影された中から優秀作品を集めて展示したものです。ここには荒川周辺に棲むヤマセミや河口近くのウォーターフロントなど、私たちが普段見たことのない荒川の新鮮な姿がありました。

また、今年、特に力を入れて参加したものに、「荒川いかだ下り2004」があります。これは寄居町藤田から当館前のかわせみ川原までの約4kmを40チームほどが自作のイカダで荒川を下り、その造りを競うものです。実際にイカダ下りに参加したメンバーの話では、普段見ているのとは違って、荒川は瀬あり淵ありで、4回ほど沈没し、貴重な体験をした、とのことでした。ちなみに優勝は「逸見、好きです寄居町RS」チームで、このカクレクマノミをかたどったイカダはその後しばらくの間、当館の野外ステージに展示させて頂きました。

さいたま川の博物館では、様々な機会に地域の方々との相互交流を行って、地域との連携を更に強め、荒川を中心とした素晴らしい自然環境に恵まれた、この地域と、当館の魅力をこの地を訪れる皆様に体感・体験していただきたいと思っています。

(展示・教育普及担当 大和 修)



荒川劇場「川と太鼓」



鳴子&太鼓フェスティバル



荒川を撮る会写真展



荒川イカダ下り2004参加の当館チーム



ムサシトミヨの里「元荒川の源流を訪ねて」

元荒川の源流域は、平成3年3月に県の天然記念物に指定された「元荒川ムサシトミヨ生息地」として知られています。世界で熊谷にしか生息していないといわれるムサシトミヨは、県農林総合研究センター水産研究所熊谷試験地（以下、熊谷試験地、今年3月31日閉鎖）が汲み上げる毎分5トンという大量の地下水によって絶滅の危機を乗り切っています。

また、絶滅寸前から現在に至るまで、元荒川周辺の人たちによる「熊谷市ムサシトミヨをまもる会」をはじめ、熊谷市の「ムサシトミヨ保全推進協議会」、県水産研究所、さいたま水族館など多くの関係者の努力や配慮によって支えられ奇跡的に生き残っているともいえます。



ムサシトミヨ生息地・元荒川の清流

ここを訪れるには、熊谷駅南口から市街地を東方向に「元荒川通り」を歩くこと20分程度、右手に文化財指定区域を示す傍示標と説明板があり、住宅地の中を曲がりくねった清流が流れています。そこが、全長約61km、元荒川の源流域です。

エビモ・オランダガラシ・ミクリなど豊かな水草をヨシやキショウブが包み、昔ながらの自然が残されています。また、川沿いには整備された遊歩道もあり、住宅街がせまっている中で、この指定区域の熊谷試験地から県道青山熊谷線までの約400mでは、周辺家庭からの生活排水が流れ込まないようにしている様子もわかります。

ムサシトミヨの生息地と合わせて見逃せないものが、この生息地周辺にはあります。元荒川の水源地といわれる「大雷神社」や、河川法の一級河川の起点を示す「一級河川元荒川起点」の碑をはじめ、少し

足を伸ばして久下地区を散策すると、「東竹院と達磨石」「新久下橋」、昔の舟運の様子を忍ばせる「新川河岸周辺の屋敷森」、昭和22年のキャスリーン台風による荒川「決壊の跡」碑など、川や水に関する歴史上の見所がたくさんあります。



熊久橋の袂にある
起点の碑



県の魚ムサシトミヨ

ムサシトミヨを見ることができるのは、保護活動を実際に行っている熊谷市内の佐谷田小学校・久下小学校・熊谷東中学校と、羽生市にあるさいたま水族館、騎西町にある県環境科学国際センターなどです。

特に、学校では、ムサシトミヨの保護活動が、地域住民を巻き込んで行われ、環境教育の絶好の場となっています。久下小学校を訪れた際、「トミヨ池」を見せていただきました。じっと目を凝らすと孵化したばかりのムサシトミヨの稚魚が、何匹も水草の間を泳ぎ回り、集まってきた子どもたちも優しいまなざしで観察しているのが印象的でした。



久下小学校のムサシトミヨ保護増殖池

(教育普及担当 福島 智)

12月

4/土 映画会「走れ! 白いオオカミ」(84分)
時間: 13:30~ 定員: 80人

11/土~1/23/日

第1回テーマ展「荒川が生んだ焼き物—今戸焼—」

5/日 野外教室「荒川を歩く」

時間: 8:15~16:30

集合: 寄居駅北口 (バス利用)

定員: 30人 (申込順) 費用: 100円 (保険料)

内容: 大陽寺から三峰神社まで歩いて観察 ☁

11/土 サタデーミュージアム「水の模様を絵にしよう」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員: 32人 ☁

19/日 荒川ゼミナール「荒川流域の開発と流路変遷」

講師: 松浦 茂樹氏 (東洋大学国際地域学部教授)

時間: 13:30~ 定員: 80人 費用: 無料 ☁



1月

15/土 映画会「はくちょうになったあひるのこ」(20分)
時間: ①13:30~ ②14:30~ 定員: 80人

16/日 ドキュメンタリー映画特別上映会

「長江悠々」(60分)

時間: 13:30~ 定員: 80人

22/土 サタデーミュージアム

「不思議な船をつくろう~ポンポン蒸気船~」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30

定員: 32人

費用: 100円 ☁

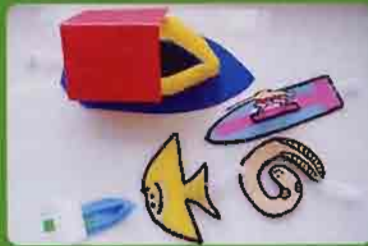
29/土 出張博物館

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30

場所: 埼玉県環境科学国際センター (共催)

定員: 50人 (申込順) 費用: 無料

内容: 水のおもしろい性質を体感 ☁



かわはくで学ぼう!!

イベント情報コーナー

2月

5/土~3/6/日

第24回「川の写真コンクール」

5/土

映画会「ピッケと大あざらし」(23分)

時間: ①13:30~ ②14:30~ 定員: 80人

12/土 サタデーミュージアム「手づくり望遠鏡で野鳥観察」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員: 32人 ☁

20/日 ドキュメンタリー映画特別上映会

「バクの川」(57分)

時間: 13:30~ 定員: 80人

26/土 サタデーミュージアム「不思議な氷の世界」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員: 32人 ☁



3月

2/水

野外教室「荒川河口を見る」

時間: 13:00~16:00

集合: JR赤羽駅東口

定員: 30人 (申込順) 費用: 100円 (保険料)

内容: 船上から荒川河口を観察する ☁

5/土 映画会「浦島太郎・こぶとりじいさん・お花

とごんべいのぼけくらべ」(30分)

時間: ①13:30~ ②14:30~ 定員: 80人

12/土 サタデーミュージアム「砂絵をつくろう」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員: 32人 ☁

13/日 野外教室「荒川を歩く」

時間: 9:30~15:30

集合: 秩父線浦山駅

定員: 50人 (申込順) 費用: 100円 (保険料)

内容: 不動の名水・秩父往還・荒川ビジターセンターなどの見学 ☁

19/土~ 第2回テーマ展「人形流しと埼玉の雛人形」

20/日 ドキュメンタリー映画特別上映会

「柳川堀割物語」(167分)

時間: 13:30~ 定員: 80人

26/土 サタデーミュージアム「ストーンペインティング」

時間: ①10:30~12:00 ②14:00~15:30 定員: 32人 ☁



原則として毎月第2・4土曜日 10:30~と14:30~は「わくわくサタデーミュージアム」、第1土曜日 13:30~は「映画会」が開かれます。最新の情報はかわはく情報等で紹介されます。

ホームページでも紹介しています!

<http://www.river-museum.jp/index.htm>

【お願い】①行事は都合により変更になることもあります。ご了承下さい。②☁印のついた行事は事前申込みが必要です。電話またはFAXでお申し込みください。③定員になりしだい締め切ります。④川の情報もお寄せ下さい。

編集・発行

さいたま川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地

TEL/048-581-8739(学芸) FAX/048-581-7332



彩の国さいたま

2004年10月30日発行